

歴史が刻まれる女の身体

— 李良枝「かずきめ」における身体をめぐる —

張 ユリ*

(e-mail : jangyl@knu.ac.kr)

< 目 次 >

- | | |
|----------------------|-------------|
| 1. はじめに | 4. 観念化された朝鮮 |
| 2. 「彼女」の身体に襲いかかる「怯え」 | 5. 水という装置 |
| 3. 実在する暴力 | 6. おわりに |

キーワード：李良枝(Lee Yangji), かずきめ(Kazukime), 身体(body), 怯え(fear), 朝鮮(Chosun)

1. はじめに

李良枝の小説には自伝的な要素が含まれている作品が多い。両親の不和やくも膜下出血によって亡くなった兄、京都への家出経験、伽耶琴や韓国伝統舞踊を学ぶための韓国留学など、李良枝の小説には作家自身の人生を連想させる素材が多く見られている。そのため、作品に現れている在日朝鮮人¹⁾として生きていくことの困難や苦悩を、読み手が作家の経験として受け入れる傾向が強いといえる²⁾。その中で「かずきめ」(『群像』1983.4)は李良枝の他の作品に対して異彩を放つものである。

* 慶北大学校日語日文学科 助教授、日本文学

- 1) 日本に居住する朝鮮半島出身の人々は在日、在日朝鮮人、在日韓国人、在日コリアンなどの呼称で呼ばれているが、各々の言葉には歴史のおよび社会的な文脈があり、区別して用いられている。本稿では、そのようなコンテキストより作品に従い、「かずきめ」において一貫して用いられている在日朝鮮人という言葉を用いることを記しておく。
- 2) そのような傾向は先行研究においても見られる。例えば、趙允珠は「李良枝における民族的アイデンティティ探求—丸正事件から伽耶琴へ—」(『日本語文学』第68輯)で李良枝の代表作ともいわれる『由熙』『ナビ・タリョン』『刻』などを挙げて、作家自身の経験によって李良枝文学が如何に変化していくのかを考察した。一方、根本尚子は「遮断感」という李良枝による造語を中心に在日朝鮮人としての作家の自意識が作品に如何に現れているかについて分析している。(「李良枝留学前の作品に表れる「遮断感」—「ナビ・タリョン」を中心に—」『日本語文学』第74輯)

「かずきめ」には「サイシュウトウ」出身の父親や家庭不和など作家の人生をほのめかす要素がいくつか現れてはいるものの、全体的な設定においては李良枝の経験と掛け離れている部分も多く見られていると考えられる。なお、主人公の「彼女」の視点と血の繋がっていない妹「景子」の視点によって交互に進行していく構成³⁾や抽象性の強い文章などによって、作品が保持している虚構性が目立っている。そのような虚構性によって「かずきめ」は、最終的に作家に回収されていく李良枝の他の作品に比べ、作家李良枝から距離を保ちつつ独自の世界を確保することに成功したともいえるのである。

作品の発表直後に掲載された「創作合評」において複数の評論家が指摘しているように⁴⁾、「かずきめ」を貫く最も大きな特性は身体感覚とその表現にある。その身体をめぐる表現は感覚的なものから観念的なものに至るまでの様々な次元においてなされている。また、李良枝文学の大半には複数の在日朝鮮人が登場しており、在日朝鮮人の女性が日本(社会)と自分(個)との間に存在する他の在日朝鮮人という対象を観察することで、在日朝鮮人という存在および自分のアイデンティティの認識を試みるという構図がよく見られる。しかし「かずきめ」においては、「彼女」と生活を共有している在日朝鮮人は母親だけであり、母親が死んでからは「彼女」にとって朝鮮というのは外部へ繋がるものではなく、自身の内部にだけ存在するものになる。そこで「彼女」においての朝鮮は作品の中で身体という媒介を通じて表わされており、その媒介になった身体が、日本人で構成されている主流社会の中で孤立されている個人の身体、さらにいえば女性の身体であることに「かずきめ」の特色があると考えられる。

以上を踏まえて、本稿では作家に収斂させようとする傾向が強かった李良枝文学の先行研究に新たな視座を提供することを目的として、「かずきめ」における身体表現を起点として作品の分析を試みる。

3) 「かずきめ」は8章で構成されており、1・3・5・7の奇数の章は「彼女」の経験を、2・4・6・8の偶数の章は「彼女」の死後に景子が経験したことを中心に進行されている。

4) 菅野昭正・高井有一・大橋健三郎(1983)「第八十九回創作合評」『群像』第38巻5号、講談社、pp.271-292。

高井有一「この小説で一番すぐれているのは、やっぱり身体感覚が鋭敏に出ていることね。自分の考えていることが、観念ではなくて、すぐ身体の痛みになり、あるいは失神したり、そういうことが感覚的に鋭く書けている。(p.285)

菅野昭正「最初にもいいましたけれども、苦しさ、辛さが、心の問題だけでなく身体感覚と結び付いていることが、この小説の評価すべき特徴だと思います。(p.286.)

2. 「彼女」の身体に襲いかかる「怯え」

「かずきめ」における身体感覚の表現は、主に主人公である「彼女」の身体的な反応及び行為を中心に描かれている。「彼女」が感じる悲しさや苦痛、恐怖などの負の感情の大半は身体的な反応や行為を通じて表わされている。例えば、小説の冒頭に登場する、「彼女」が小学校4年生だった時のことを見てみると、社会科教科書に朝鮮について記載されているページを授業でいつ勉強するかが予測できた時、「彼女の小さい身体はよじれ始め」る。そして当日になり、4時限に予定されている社会科授業の直前に、「彼女」の身体は強い拒否反応を起こす。

学校で三時限の授業中にふいに頭が朦朧とし始め、臉に力がなくなり、足や手が震えだした。額に汗が流れ、重くなった首が支えきれずに机の上にかたとうつ伏した。5)

上の引用文の他にも、継父と長男の敏彦との対立で緊張が走る食卓で「彼女」は手当たり次第食べ物を口の中にかきこみ、トイレに行っては「胃が波打って破裂しそうほど」「強引に喉奥をひっ搔い」て全てを吐き出すことを繰り返す。ここに見られる「紅潮して脹ら」んだ顔に「目いっぱい涙があふれ出」て苦しむ「彼女」の描写には、菅野昭正が指摘しているような「肉体的な感覚を伴った辛さ」6)が表現されている。「彼女」自身が感じ取っている心理的動揺や負の感情は「彼女」の身体的な拒否反応を通じて可視化される。そしてそのような身体的反応を起こす「彼女」の感情の根底にあるのが「怯え」である。

「彼女」は常に何ものかに怯えており、その怯えは「彼女」の内面において増殖していくように見える。崔孝先は「李良枝「かずきめ」I—“怯えの実体”—」において「彼女」が感じる怯えが「彼女」を死に至らせた原因であると指摘し、「かずきめ」において「彼女」が「怯え」を感じた場面と原因を整理しながら不安から怯えに、そこから恐怖に至る「彼女」の感情の変化について分析している7)。崔孝先が整理した「怯え」の原因について簡略に紹介すると、①小学生4年生の時に社会科教科書に出てくる朝鮮、②中学2年、継父と兄の喧嘩、③高校の時、暴風雨の音に壁が迫ってきて自分を押しつぶしてしまいそうな拷問の感

5) 李良枝(1993)「かずきめ」『李良枝全集』講談社、p.63.

6) 菅野昭正・高井有一・大橋健三郎(1983)「第八十九回創作合評」『群像』第38巻5号、講談社、p.279.

7) 崔孝先(2004)「李良枝「かずきめ」I—“怯え”の実体—」『国文学論叢』第49号、竜谷大学国文学会、pp.94-95.

覚、④朝鮮人だと知ると誰も知らない方法で日本人医者に殺されるのではないかという恐怖、⑤関東大震災の時のように日本人に虐殺されるという恐怖、⑥小さな虫、である。

ここに挙げられている「怯え」の状況と原因から、「彼女」を怯えさせるものは実生活の面と自分の内面における観念上の面という二つの次元において現れていることが分かる。②③⑥の場合は実生活において、①④⑤は実際の出来事ではなく、「彼女」の頭の中の観念によって「怯え」が発生しているといえよう。より詳しくいうと、②と③の「怯え」は家庭内で起きている暴力と関連しており、①④⑤の「怯え」は朝鮮と関わりがある。要するに「彼女」の「怯え」は家庭内の暴力と朝鮮に起因しているといえるのである。

家庭内の暴力、すなわち実生活の中に実在する暴力は「彼女」の身体に直接的に行使されるものである。一方、朝鮮は在日朝鮮人である「彼女」にとって逃れられないものである同時に、「彼女」が感じる不安の根底に存在するものである。「かずきめ」において朝鮮が「彼女」の身体に直接的な力を行使する場面は見られない。つまり、朝鮮人であるという理由で「彼女」が他人または社会から直接的な被害を受けるという出来事は作品において登場していない。朝鮮という存在が実在する暴力に最も近く接近したのは、血の繋がっていない日本人の兄から受けた性的暴力の結果として現れた身体的感覚を表現した③の場合である。しかし、ここで「彼女」が暴力の被害者の立場にあったことの背景には、経済力を持っている男性に娘と共に身を託した再婚相手の連れ子であることと朝鮮人であること、そして女性であるという三重のマイノリティーの構造があり、必ずしも「彼女」が朝鮮人であることが暴力の原因になっているとはいいい切れない。朝鮮が「彼女」の「怯え」の原因になっている①④⑤では、朝鮮が「彼女」の内面において観念化され、その観念が内部から暴力的な力を発生させ、その力が身体を支配していく様子を見せているといえる。

以上を踏まえて、ここでは実在する暴力と観念化された朝鮮という二つの観点を中心に「彼女」の身体をめぐる問題に迫ってみたい。

3. 実在する暴力

暴力を単に身体的に危害を加えるという意味だけではなく、言語や態度による精神的な被害までを含めて考えると「かずきめ」における暴力は、生徒たちに馬鹿にされていた数学教師の佐藤を労うために「彼女」が質問をした時、級友たちに「ごますり」と揶揄されたことを除いたら、「彼女」が受けてきた実在する暴力の大半は家庭内で起きたものである。

実生活において「彼女」を迫害したのは、朝鮮人の実父と日本人の継父の二人の父から受ける暴力や母の体罰、兄たちによる性暴力、景子の嫌がらせなど、血が繋がっているかまたは法律的に結ばれている身内によるものであった。

日本人夫とその子供三人と、朝鮮人妻と連れ子一人で構成された家庭において発生した暴力の被害者は朝鮮人母娘であった。しかし、母娘に向けられた軽蔑と敵対心は彼女らの出自に関わるものであるというよりは、自分たちの母が亡くなった直後に再婚した相手とその連れ子に対する敵対心に近いものである。家に来てすぐ二人が朝鮮人であることを知らされた景子は、二人の出自にこだわる様子を見せずに「彼女」の母について「働き蜂としか思えない継母はいつも和服だけを着、まるで家政婦のようだった」とし、「継母に対する不満やこだわりはあまり感じなかった」と語っている。そこから、この朝鮮人母娘が家庭内の弱者に位置していたのは民族間の力関係というよりは後妻と連れ子という立場が強く影響していたといってもよからう。

「彼女」が受けた家庭内の暴力は様々な理由から発生した。景子は「美しく、成績も良かった」「彼女」に対する劣等感で「連れ子であることや朝鮮人であることを言いたて」にして意地悪をした。そのような景子の意地悪が原因で母は「彼女」を叩いてから「広間の柱にくくりつけ」た。継父は母と喧嘩になると、母にしがみつ「彼女」を殴り飛ばした。このように日常的に起る暴力に「彼女」は堪えていたが、それは「彼女」の母も同様であった。

酒癖が悪く、暴力的であった実父と同じく、継父も「何かにつけて母を怒鳴りつけ、暴力をふるった」。「彼女」は「あれほど殴られたり蹴られたりしていながら、また同じような男と一緒にした母」のことが理解できなかったが、母にとっては子供を連れて生きていく上で夫の暴力は何の問題でもなかった。母は女性として生きていく道として経済的に、制度的に男性に頼って生きていく道を選んだのである。そのような母が「性器から悪臭を放ち」ながら子宮癌で死ぬのは象徴的である。母の子宮は「彼女」が生れてきたところであり、夫による暴力を堪えてきた母の女性性のシンボルである。「彼女」は子宮癌で死んでいく母を見つめながら、女性として受けてきた暴力、またこれから受けるであろう暴力の連鎖を断ち切るために、自分の内部から女性としての存在意味を除去することを決心した。

彼女は性交を自分にも相手にも許さなかった。生殖を否定した彼女は、性交という行為も、それから得ることのできる快感も、自分に厳しく禁じていた。彼女が唯一性交を許したのは森本一郎だけだった。8)

血の繋がっていない兄たちから受けた性的暴力と妊娠の経験、そして母の子宮癌が「彼女」にして性行為と生殖に対する拒否反応を呼び起こしたのである。母の死後、「彼女」は実在する暴力に対抗していく。連れ子であるという理由で搾取されたことに対しては母の葬式の翌日に継父の事務所から大金を盗んで家を出る行為で抵抗し、性的暴力に対しては性行為を拒絶して生殖器官を取り除くことを望むことで実在した/する暴力に終止符を打とうとした。また、男性たちの誘惑をあっさり承諾したり、男を誘って売春をやったりすることを通じて「彼女」は性的な奔放さをもって性をめぐる男性たちの暴力を無力化しようとしたのである。

「彼女」の家出の後、残された家族たちの「彼女」に対する態度を見てみると、景子は「彼女」のことを「お姉さん」と呼び、父や兄たちは「身内だから警察に訴えなかっただけ」であり「まだ時効が来た」とは思っていないなど、まだ家庭の範疇の中で「彼女」を捉えていることが分かる。しかし、「彼女」は父と兄たちがいる家から逃げ出すことで実在する暴力の根元にあった家庭を自ら崩壊させ——残された日本人家族たちの家庭は朝鮮人母娘がいなくなっても維持されたとしても、少なくとも「彼女」が認識する自分の家庭は崩壊した——、家庭内に限定されていた「彼女」に対する実在する暴力を消滅することに成功したのである。

4. 観念化された朝鮮

「かずきめ」において、生活の中に実在していた暴力より深く根を下ろして「彼女」の身体を支配し、無意識的に「彼女」を襲いかかっていたのが朝鮮であった。それは「彼女」の内面に存在する観念的なものであり、そこから「彼女」の根元的な「怯え」は始まっているともいえる。

「かずきめ」において朝鮮という出自を理由に「彼女」が直接的な差別や被害を受ける部分はほとんど見られない。日本人の兄たちが朝鮮人であることを口に出して「彼女」を批判するような場面は出てくるものの、前述したように、朝鮮人であるというよりは後妻と連れ子であるという家庭内の力関係が暴力の根本的な理由になっているといえる。村瀬甲治は「朝鮮人ゆえに強姦され妊娠し墮胎した」⁹⁾として、義理の兄たちによって「彼女」が受け

8) 前掲書、李良枝(1993) p.92.

9) 村瀬甲治(2002)「李良枝「かずきめ」試論—「書くこと」をめぐる物語の所在—」『言語態』第3号、言語態研究会、p.90.

た性的暴力には民族的な蔑視が背景にあると述べている。しかし「彼女」の妊娠が発覚し、日本人の兄である敏行による性的暴力が明らかになった時、敏行が「なんだ、なんだ、なんでそんなに朝鮮人の肩をもつんだよ……オヤジ、……オフクロが死ぬのを待ってたみたい、こんな親子を連れて来て……臭いんだよ。俺、こんな臭い家、出てってやる……」と抗議する場面を見ると、上述したように母と「彼女」の出自は恨みの口実として使われたといった方が妥当であるといえる。さらに、「彼女の役は、もし彼女がこの家にやって来なければ、景子が担わされていたかも知れなかった。今日と同じ喧噪が少し脚色を変えただけで、遅かれ早かれ起きていたに違いない」といった「彼女」の語りからも、その暴力が日本と朝鮮という民族による優劣関係から発生したものではなく、性別によって行使されたものであるということが分かる。

作品全体を通して「彼女」と母に朝鮮という出自を知られまいとする態度は強く見られる。母の再婚後に転校した「彼女」は学校で出自が知られておらず、母は「いつも和服ばかり身につけて」日本人として振る舞うという自己規制を見せている。実生活において朝鮮と関わって受けた直接的な差別や被害が作品に見られないとすれば、朝鮮に対する「彼女」の「怯え」はどこから発生しているのか。「かずきめ」において、朝鮮が引き金になって「彼女」が「怯え」を感じる場所は以下の3ヶ所である。

- ① 小学校4年生の時に社会科の教科書に印刷された朝鮮という文字と略図
- ② 森本との生活中に地震を感じて、そこから関東大震災の朝鮮人虐殺を連想
- ③ 加代に打ち明けた、朝鮮人は日本人医者によって殺されるという妄想

この3ヶ所には朝鮮という存在に対する「彼女」の思考過程の変化が示されている。最初は本に載っている朝鮮に関する直接的な表現による「怯え」であったのが、次は現実のある出来事によって自分が直接的に経験したことのない歴史の一場面が喚起される。最後は完全に自分の思考の中で作られた、朝鮮に関する話であるといえる。

彼女の身体が初めて得体の知れない何ものかに支配されたのは小学校4年生のことであった。ある月曜日、学校で「彼女」は急に発熱と共に頭が朦朧として、全身が制御不能の状態に陥ってしまう。その日は社会科の授業で「チョーセン」について勉強する日であった。

社会科の教科書のあのページには<朝鮮>という文字がいくつも印刷され、朝鮮半島

の略図までが載っていた。書かれてある内容以前にチョーセンという響きが彼女をすでに怯えさせていた。母の再婚とともに昨年転校してきたばかりの彼女の出自を級友たちは知らないはずだった。だが、日毎に脹らんでいく形のない不安や、圧迫感は、蜘蛛の巣のように粘っこく彼女にまとついた。…(中略)…月曜日の四時限に自分は坂井と級友たちに板挟みにされる……彼女は震えながらその日の自分の姿を思い描いた。10)

4年生に進級し新しい教科書を手を取った時から気づいていた社会科の教科書に載っている「朝鮮」という文字は「彼女」を動揺させ、「形のない不安や圧迫感」になって「彼女」にまといついた。そこで「彼女」は朝鮮という言葉が表わす歴史的・社会的な意味合い以前に、「チョーセン」という響きだけに反応している。「チョーセン」という響き一音一は日本人だけに意味を持つ日本語の言語的記号である。ここでは朝鮮の実体は問われていない。日本人によって言語として発せられる朝鮮、すなわち日本人にとっての朝鮮というものに傍点が付けられているのであり、「彼女」が内面化してきた朝鮮人としての負の意識が「怯え」の底に存在するのである。

小学校で出自が知られるのを恐れていた彼女は、母が死んで家出をした後に出会った恋人の森本に自ら朝鮮人であることを告白する。森本は「彼女」の出自を聞いてそれを重く受け取らずに「あっさりを受け流して、まぐろ船に乗っていた頃の同僚のことや、韓国で遊んだ時に好きになった女の子のことを話」す。出自が知られるかも知れない不安もなくなった、森本との安定した生活の中で、却って「彼女」の朝鮮に起因する「怯え」は激化する。

<さつき地震があったね、いっちゃん>/<そういえば、少し揺れたな>/何を言いだすのか解らないままそう答えると、彼女は話し始めました。/<いっちゃん、また関東大震災のような大きな地震が起こったら、朝鮮人は虐殺されるかしら。一円五十銭、十円五十銭と言わされて竹槍で突つかれるかしら。…(中略)…私は逃げ惑うの、その後ろを狂った日本人が竹槍や日本刀を持って追いかけてくるわ、私は逃げきれなくて、背中をぐさっと刺されて、胸も刺されて血だらけになってのたうち廻るの。いっちゃん、あれは痛いよね、とつても——…(中略)…それでね、その包丁で胸のところと手首を切りつけてみたの。痛かった。それに血が、本当にわつと出てくるんだもの。ぐさりとやってみたかったけれど、もっと血が出るのかと思うと恐くなって——今度は金槌で脚を叩いてみたわ、そしたらやっぱり痛かった。ね

10) 前掲書、李良枝(1993) p.64.

え、いっちゃん、私は虐殺されるかしら、ねえ、どうなるの、もしも殺されなかったら、私は日本人なわけ？でもどうしよう、あれは痛いものね、血がいっぱい出るんだものね>11)

「彼女」は実際にあった地震から関東大震災と朝鮮人の虐殺を連想する。ここでは、現実の出来事から触発されて自分が経験したことのない歴史上の出来事を自分の経験として受け入れていく、歴史の追体験がなされているのである。さらに「彼女」は歴史上における出来事を自分の身体をもって再現する。関東大震災の時に虐殺された朝鮮人の身体的な痛みと血の幻影を、自分の身体の痛みと血によって現実化・可視化する方法で「彼女」は歴史的に迫害された朝鮮と自分と同一視していく。が、同時にその痛みは「彼女」にとって虐殺された朝鮮人たちとは違って、自分はまだ生きていることの証明にもなっているのである。

日常における暴力と歴史によって喚起される暴力。直接に経験したことのない、観念的に想像された暴力を彼女は自傷行為を通じて実在する暴力に置き換えていく。そして、歴史から来る恐怖を身体感覚としての痛み置き換えることによって「彼女」は歴史の一部と自分を同一視することができた。そのような過程の中で「彼女」の身体は歴史に支配され、侵食されていくのである。「彼女」は社会的には朝鮮の歴史を背負って生きていくことを拒否したが、朝鮮の悲惨な歴史を身体上において自ら再現しながら、歴史が刻まれる身体として生きていくことを無意識的に受け入れてしまったのではないか。

5. 水という装置

「かずきめ」の作品全般において強烈な存在感を示しているのが、小説のラストで「彼女」が帰る水の世界である。この水の世界は、小学4年生の時に朝鮮という言葉に気圧されて気を失った「彼女」がお祓いの老婆に導かれて入っていく無意識の世界として現れている。

閃光が走り、ふいに眼球がじゅっと灼かれるような痛みを覚えた。老婆の顔も寝ている彼女をとり囲んでいた家の者たちの姿も消えた。目の前が真っ白な膜で覆われ、それが眼球を刺し通すほどの強烈さで輝き始めた。彼女は瞬きできずに目を見開いたまま、身体を硬直させた。足先から血管という血管が波打ち始め、耳の中が水で塞がったようにあらゆる

11) 前掲書、李良枝(1993) pp.81-82.

音を閉め出した。どこからか低い唸り声が聞こえてきた。間伸びしたその声が発せられるたびに、目の前の白い膜が微妙に揺れ、声の強弱に合わせて陰影を作った。/<出て行け、水の中に出て行け>/同じ言葉が三度繰り返された。彼女ははっきりとその言葉を聞きとり、反芻した。白い膜は何の前触れもなくずっと消えた。しばらくの間、彼女の目はぶれてぼんやりとしていた。やがて焦点が定まり、天井の木目一つひとつを辿れるようになっていた。熱が下がり始めた。波打っていた血管が次第に静まっていき、彼女は昏睡状態に入った。12)

自分の「身体はどこかにかくれているある力の不気味さ、その偶然さに気圧されてしま」い気を失った「彼女」はお祓いの老婆によって無意識の世界に入る。昏睡状態で無意識の世界に入った「彼女」は「身体を四方八方から圧迫するような奇妙な感覚」から自分が水の中にいるのだと気づき、水面に向かって身体を伸ばすことで現実世界に戻る。しかし、「彼女」が初めて水という存在を感じ取ったのは引用文のところではない。急に発熱し早退した、社会科の授業があった日、教師や級友たちの声を後にして教室を出ようとした時、「教室の情景も囁かれる声も、漂う水の中に屈折して遠のいていくように」感じる。彼女に付きまっていた水の幻覚は朝鮮による発症が起きたその瞬間から始まっているのである。水の幻覚が現れた直後の「彼女」の様子について「糸あやつりの人形がふいに糸を切られてしまったように」と描写されていることから、「彼女」がこれまで生きていた世界から離れて水の世界に入ったことが暗示されていると考えられる。すなわち、「彼女」は「チョーセン」という言葉に身体が激しく反応した時から現実社会と水の世界、その境界に立って生きていくことになり、「その日初めて知った自分の中のある力」がそれまでの「糸」に代わって「彼女」の身体を支配することになったのである。

小学4年生の「彼女」の身体に<不思議な力>が働きかけた時に聞こえてきた「出て行け、水の中に出て行け」という唸り声に導かれて水の中に入っていき小説の冒頭部分と、「出て行け、水の中に出て行け」と蘇った唸り声に促されて浴槽の中に身を沈める「彼女」が死を迎える小説の末尾部分は呼応している。ただ、異なるのは小学校4年生の「彼女」は「水面に向かって身体を伸ばした」が、23歳の「彼女」は水の中が与えてくれる安らぎに身を任せたという点である。

彼女は服を脱ぎ始めた。そして全裸になり風呂場のドアを開けた。ちろちろと水道の水が

12) 前掲書、李良枝(1993) p.65.

浴槽からあふれ出ていた。/＜出て行け、水の中に出て行け＞/頭の奥から低い唸り声が甦った。その声に促されるように彼女は浴槽の中に身体を沈め、頭を沈めた。/彼女の耳にサイシュウトウの岩肌にぶつかる波の音が聞こえてきた。彼女は吼え立つ波間に跳びこんだ。砕ける海面の音が遠のき、自分の身体を水の中に解き放った。両手や両脚が自由に水の感触をまさぐり始めた。生れてから一度も味わったことのない安らぎが、深く全身に浸み渡って行き、水の中で彼女はいつまでも揺らめいていた。13)

上の引用にある「彼女」の最期を表わした場面は、「彼女」が水という媒介によって実父の故郷である「サイシュウトウ」に帰ることをほのめかしている。「彼女」はなぜ「サイシュウトウ」に帰るのか。父親の故郷ということから、「サイシュウトウ」に帰ることで「彼女」は朝鮮人として朝鮮への回帰を果たしたと解釈することもできると考えられる。しかし、ここでは「サイシュウトウ」という表記に注目したい。

濟州島は植民地時代から1948年に起きた「四・三事件」前後まで多くの朝鮮人が渡日した地域の中の一つであるが、「かずきめ」にはそのような歴史的な背景や濟州島からどれほどの朝鮮人が日本に渡ってきたのかについて言及されていない。すなわち、「彼女」が帰る「サイシュウトウ」とは濟州島における歴史的な文脈を取り除いたものであり、「彼女」は「サイシュウトウ」を母から聞いた父の故郷であると同時に自分の起原として直観的に感じているだけである。つまり、「チョーセン」が日本人の記号であるとすれば、「サイシュウトウ」は自分が受け継いだ血の起原を意味する「彼女」の記号であるといえよう。そして、その血の起原とは朝鮮の歴史が除去された人間としての存在の起原を意味するのである。

また浴槽に身体を沈めて自分の起原を辿っていく行為は、人間という存在が持つ根元的な意味として考えれば、胎児が羊水から産まれることを連想させる。そのようなことから「かずきめ」において「彼女」が水の中でしか感じられない身体的な安らぎには、それまで自分の身体を抑圧していた様々な暴力、とりわけ観念化された歴史の支配から解放されて胎内に回帰した個人という意味が表されているとも考えられる。

6. おわりに

「かずきめ」において実在する暴力は性(ジェンダーおよびセクシュアリティ)をめぐるもので

13) 前掲書、李良枝(1993) p.94.

あり、観念化された朝鮮を通じては歴史によって個人の身体が支配されていく過程が見られた。小説「かずきめ」はこの二つの力が一個人としての女性の身体を通じて表れている物語であるといえよう。

日本社会と男性によって二重に抑圧されている在日朝鮮人女性の境遇を表わす普遍的な問題、家庭内の暴力や経済面の問題(経済的に男性に依存したりまともな職場が得られなかったりするなど)が作品の全面に出てくるものの、「かずきめ」は社会的ではなく、極めて「個」の物語として完成されている。それを可能にしているのが歴史が刻まれた女の身体をめぐる表現なのである。「かずきめ」において在日朝鮮人の問題、つまり自分の起原を朝鮮に置いているということが惹起する現実的な問題——民族や国籍、言語など——は現れていない。「個」の存在に対する本質的な疑問とその確認が見られるのみである。

「かずきめ」が見つめているのは社会の中の在日朝鮮人問題を越えて、その根底にある歴史としての在日朝鮮人に遡っていく。「彼女」の周囲には母を除けば在日朝鮮人がおらず、また「彼女」が直接的に朝鮮という国や民族に触れたり経験したりすることもなかった。にもかかわらず朝鮮は激しい身体反応を呼び起こす「怯え」として「彼女」の生涯に付きまとっていたといえる。

李良枝の「かずきめ」は現実世界における在日朝鮮人をめぐる差別や社会的な問題から離れて、より根元的な問題に接近していきこうとした試みである。そのような試みは、個人によって観念化された歴史が現実の社会やアイデンティティという問題を越えて直接的に身体に入ってくるという、歴史に支配された「個」の身体というものを露にしているのである。

【参考文献】

- 박정이(2007) 「재일 2세 문학의 변용(1) - 이양지 『유희』와 이기승 『0.5』의 '신선함'을 중심으로 -」 『日本語文学』第38輯、pp.291-304.
- 李良枝(1993) 「かずきめ」 『李良枝全集』講談社、pp.63-95.
- 菅野昭正・高井有一・大橋健三郎(1983) 「第八十九回創作合評」 『群像』第38巻5号、講談社 pp.271-292.
- 崔孝先(2004) 「李良枝「かずきめ」I—「怯え」の実体—」 『国文学論叢』第49号、竜谷大学国文学会、pp.94-95.
- 根本尚子(2016) 「李良枝留学前の作品に表れる「遮断感」—「ナビ・タリオン」を中心に—」 『日本語文学』第74輯、日本語文学会、pp.141-158.
(DOI: <http://dx.doi.org/10.21792/trijpn.2016..74.008>)
- 村瀬甲治(2002) 「李良枝「かずきめ」試論—「書くこと」をめぐる物語の所在—」 『言語態』第3号、言語態研究会、p.90.

趙允珠(2012)「李良枝『かずきめ』論—「怯え」の行方—」『文芸と批評』第11巻5号、文芸と批評の会、pp.71-82.

_____ (2015)「李良枝における民族的アイデンティティ探求—丸正事件から伽倻琴へ—」『日本語文学』第68輯、日本語文学会、pp.473-494.

(DOI: <http://dx.doi.org/10.21792/trijpn.2015.68.024>)

논문 투고 일자 : 2019. 10. 11.

논문 심사 일자 : 2019. 11. 03.

게재 확정 일자 : 2019. 11. 06.

 < 要旨 >

 歴史が刻まれる女の身体
 — 李良枝「かずきめ」における身体をめぐる —

張ユリ

李良枝の「かずきめ」は自伝的な要素が強く見られる作家の他の作品に対し、全体的な構造において虚構性が目立つ小説であるといえる。そのような虚構性によって「かずきめ」は、最終的に作家に回収されていく李良枝の他の作品に比べ、作家李良枝から距離を保ちつつ独自の世界を確保することに成功した。

「かずきめ」において「彼女」と生活を共有している在日朝鮮人は母親だけであり、母親が死んでからは「彼女」にとって朝鮮というのは外部へ繋がるものではなく、「彼女」自身の内部にだけ存在するものになる。そこで「彼女」においての朝鮮は作品の中で身体という媒介を通じて表わされており、その媒介になった身体が主流社会において孤立された個人の身体、女性の身体であることに「かずきめ」の特色がある。

以上を踏まえて、本稿では作家に収斂させようとする傾向が強くあったこれまでの李良枝文学に対する解釈に新たな視座を提供することを目的として、歴史という観念に支配された女性の身体という観点から「かずきめ」における身体表現の分析を試みる。

 History -Engraved Woman's Body
 — The Concept of Body in Lee Yangji's *Kazukime* —

Jang, You-lee

In comparison with autobiographical works produced by other writers, Lee Yangji's *Kazukime* has a notably strong flavor of fiction in the overall structure of the novel. This flavor of fiction lend the work a unique worldview, distanced from Lee herself. This feature contrasts with her other literary works, which are ultimately reduced to her character.

In *Kazukime*, "she" lives alone with her Korean-Japanese mother. After the death of her mother, the concept of Chosun is only internal to her and no longer serves as a point of connection with the outer world. The notion of Chosun represented inside her is expressed through her body in the novel. It is a distinctive feature of *Kazukime* that this notion of body is manifested in the body of a woman isolated from mainstream society.

In the present work, I attempt to provide a new perspective from which the literary works of Lee Yangji can be studied without merely examining them in terms of the writer. To this end, I shall analyze the expressions of body used in *Kazukime* in light of the history-engraved woman's body.